第 14 回　アジアヘルニア学会参加記

札幌道都病院　外科　西森英史

雪の降る札幌から 30 度を超える灼熱のドバイで開催された上記学会に出席する機会を頂きました。2016 年、横浜開催の第 12 回のアジアヘルニア学会に出席しましたが、海外開催の同学会出席は今回が初めてでした。金融都市として発展めざましいドバイでの学会開催でしたが、参加費のカード支払いができずなぜか現金送金のみで、発表準備よりも送金に労力を割きました。詐欺の不安に苛まれつつも無事にプログラムがメールされ、出席の運びとなりました。

日本で外科感染症学会に出席してからのドバイ訪問で、学会出席は 3 日間日程の 2 日目朝からとなりました。中東からはもちろん中国からの出席者が多いように感じましたが、予想よりもこぢんまりとした学会でした。演題は鼠径部ヘルニアから横隔膜ヘルニアまで広くヘルニア全般の話題がカバーされていましたが、発表や手技のクオリティは、普段日本の学会で目にしているレベルには及ばない印象で国際学会にありがちなゆるい雰囲気が漂っていました。私は成人鼠径部ヘルニアに対する IPOM 法に関する発表をさせて頂きましたが、最終日の最後のセッションで聴講者が少なく、あまりディスカッションが盛り上がらず少し残念な思いをしました。

真夏には 50 度を超えるドバイですが、この時期は比較的過ごしやすくランチは屋外開催でした。たまたま隣になったドバイの外科医と話す機会があり、UAE（ドバイは UAE の 7 つの国の一つ）の生活や医療制度などを興味深く聞くことができました。遠くから響くコーランを聞きながらのランチは忘れられない経験となりました。

学会の合間にドバイ観光する時間も持てましたが、見慣れないイスラム文化圏は異文化感たっぷりでした。6 車線のハイウェイ、世界一高いバージ・カリファに代表される多くの高層建築物や自動運転の地下鉄は未来都市を予感させました。一方で古くは海上貿易で栄えた名残もそこかしこに見受けられ、良く言えば昔ながらの、あるいは格差社会を生きる地元民の生活も垣間見ることもできました。

このような貴重な経験をするきっかけを頂きました日本ヘルニア学会　国際委員会会長の吉田先生、理事長の早川先生をはじめ、関係各位に深く感謝致します。今後も日本ヘルニア学会の発展に微力ながら尽力していく所存です。